

中前総領事の第 7 回ブラジル統合フォーラム(FIB)への出席(於:文協)



11 月 21 日～22 日、ブラジル日本文化福祉協会(文協)本部にて第 7 回ブラジル統合フォーラム(FIB)が開催され、中前総領事が「今後 2 年間における日本とブラジルの活動の展望」と題する基調講演を行いました(テキスト: 日本語版、ポルトガル語版)。FIBは国内各地の日系団体の活性化及び関係緊密化を目的とし、主として次世代を担う若手を主体としたフォーラムです。本年は約 100 名の参加者がサンパウロ州内外から集まりました。

この 2 日間の議論の活発な議論を通じて次世代日系社会を担う皆様が様々な課題について議論を深めるとともに、このフォーラムが共通の利益を追求するためのネットワークの土台となったことと期待されます。

そして、私たちの総領事館も、そのネットワークの一員でありたいと願っています。



文協フォーラムでの講演
「今後2年間における日本とブラジルの活動の展望」
在サンパウロ日本国総領事 中前隆博

1. 冒頭

本年は日本とブラジルが友好通商航海条約に署名してから120周年になります。この間、日本とブラジルの間には「特別な人の絆」が築き上げられました。ブラジルの日系人コミュニティは、国外のものとして世界最大の規模であり、また、日本には約18万人のブラジル人が居住しています。

ここで「世界最大の規模」と申しましたが、その関連でこの数ヶ月間私も悩んできた日系人の数を巡る議論を紹介します。

サンパウロに赴任して以来、ブラジルの日系社会の規模についての質問をしばしば頂きます。正確な数字を調査したいという思いはありますが、その際に最初に直面する壁が、そもそも「日系人であること」の定義です。混血が進み、6世～7世の世代までいくと、名前も風貌も日本人とはかなり離れている人も当然おられます。

その中で、私たちが注目したのは、ブラジル地理統計院(IBGE)が2000年の調査を基に2008年に出した、ブラジルの各州毎に日系人の数を調べた結果の報告です。この調査では、調査票の自らの人種を示す欄に日系人の箇所印を付ければ「日系人」とカウントされるものです。

これを用いつつ、一部は実態をよりよく反映するための調整を行った結果、現在の在ブラジル日系人は190万人という数字を得るに至りました。もちろん、「自己申告制」に基づいて日系人をカウントするこの手法については、統計としての客観性の観点から様々な議論もあります。

先日、日本の著名な経済学者にこの議論を紹介したところ、ある興味深い話を教えて頂きました。日本で「日本にはアーティストが何名いるか」という議論があり、その際、「アーティスト」をどう定義付けるかが論点となりました。結果、日本の国勢調査の職業分類調査で、「芸術家・クリエイター」の欄に印をつけた人の総数をもって日本のアーティスト数と定義付けることになりました。もちろん、皆がアーティストとして生活できるわけではなく、そこには高収入の芸術家もいれば、アーティストとしてだけでは生計を立てられない人もいますが、そこは区別されていません。

そのような定義が一旦決まると、現在日本にはアーティストが60万人いる、とか、日本の就業総数の100人に一人はアーティストである、という結果になります。

その経済学者によれば、ここで重要なのは、職業人口の1%にあたる人が自らをアーティストと名乗っているという事実とことです。

ブラジルの日系人数もひょっとしたら、このエピソードにヒントがあるかもしれません。先述の調査の結果においては、自分が1/4日本人か1/8か、あるいは、面立ちや苗字は重要でなくなってきました。いずれ将来、血統上日本人の血を引く人の正確な数自体を把握することが重要なのではなく、それらの人々の中で、日系の自覚と表現の意思を有する人々がどれくらいいるかに着目すべき時代がやってくるのでしょうか。当然、このような考え方は、査証や移住、帰化といった法的な業務に適応できる定義ではありません。しかし、私にとっては、190万人のブラジル人が自らを日本にルーツを持つ人種であると意識して「自己申告」しておられることが大切と考えています。

私がこれを大切と思うのは、このことが、自らのアイデンティティを表明する動機や自意識にかかる問題であると考えからです。

このことに関しては、もう一つエピソードを紹介します。着任して間もないころ、家族を連れてサントスに観光に行きました。その際、ゴンザガ海岸にそびえ立つオオタケ・トミエ氏の赤いモニュメントを

見て度肝を抜かれました。その芸術性の高さはもちろんながら、何よりも、サントスという観光地のもっとも目立つ場所に特定の移住者が自身の歴史を記念するためにこれほど 壮大な碑を建てるようなことがどうして可能だったのか。反対の声はなかった のだろうか、という疑問を拭えませんでした。サントス市の日系人代表と会った際、この疑問を率直にぶつけてみましたが、反対する者は一人もいなかった との答えでした。また、サントス市長は、今はこのモニュメントはこの街の新しいシンボルとなっていると語っておられました。

私はこのような話を伺って、この記念碑はサントスの精神的な財産として市民のコンセンサスを得ているのだと思うに至りました。この他にも様々な機会に、ブラジルは日本人移住者とその歴史を尊敬し、そのアイデンティティがブラジルの文化の一部となってきたことを誇りさえに思っていると感じることがありました。

以上を申し上げた上で、私は、ここに集まった皆さんと私のように日伯関係のために働く者は共通の目標をもっていると思っています。ブラジルの若い日系人である皆さんはブラジルにおける自らのアイデンティティ・グループの立場と誇りを維持・強化するため、また、私たちは日本政府から派遣されてブラジルとの戦略的パートナーシップを強化するため、私たちは日本人移民の歴史という資産をブラジルにおいて保持し、強めてゆくということです。このために、相互に連携するパートナーとなるのは自然のことでしょう。このことがまさに、先に述べた自覚に基づくニッケイの定義と深い関係をもつものと思っています。

2. 2015年の行事

本日の演題は、「今後2年間における日本とブラジルの活動の展望」ですが、以上のことを長々とお話したのは、そのことと私たちが行っていることの意味を関連付けて知って頂きたかったからです。

本年は120周年ということで、様々な行事が開催されました。総領事館が認定した事業だけで本日時点で158件、ブラジル全土になると約 450 件にも上ります。

2月のサンパウロのカーニバルには、アギア・デ・オウロが「日伯 120 周年の絆」をテーマに参加しました。これには青森県五所川原市の立ねぶたも 登場し、ブラジルのカーニバル史上最多となった日系人550名、日本人100名を含む 3500 名がサンボードロモで日伯の想いを乗せて踊り明かしました。日本政府からも、宇都外務大臣政務官が参加しました。

7月末に開催されたフェスティヴァル・ド・ジャパンには日本政府として初めてパビリオンを出展しました。自分も3日間すべて参加し、全ブースを見て回りましたが、これだけの規模の日本祭が国外で行われていることに圧倒されました。9月にはインターラーゴス・サーキット場でコシノ・ジュンコ氏がプロデュースした花火祭が開催され、小雨が降る中、夜空を彩る 4500 発の花火を約 1 万人が観賞しました。

申し上げたとおり、これ以外にも多くの行事が行われたが、共通して言えることとして、これらの行事の準備には世代を超えた日系人の方々が何ヶ月も前から入念な準備をして実現したものです。次世代を担う日系人と年配の日系人が、行事への参加を通じて日本人のアイデンティティと誇りを一致して共有する機会となっているのではないのでしょうか。

さらにこうした行事のピークとなったのが、秋篠宮同妃両殿下のブラジル御訪問です。両殿下は10月の末から10箇所約2週間に亘って訪問され、各地で日系社会の歓迎を受けられました。自分もサンパウロ及びマツ・グロッソ・ド・スール州の日程にお供しましたが、各地での両殿下と日系社会の方々との出会いは感動的なものでした。

また、12月上旬にはルセーフ大統領が日本を訪問されます。国際舞台での 戦略的なパートナーとしても両国の政治経済関係が一層強固なものとなること が期待されます。

3. 2016年の事業

次に2016年について述べます。日伯関係の文脈では2つの大きな出来事を予定しています。一つはリオ・オリンピック・パラリンピックの開幕です。2020年は東京で開催されることから、この大会は両国にとって特別な意味を持つこととなります。リオから東京への引継ぎは、両国の強い絆を世界に向けて発信する機会となり、その中でブラジル日系社会も注目を集めることが期待されます。また、今後両国がスポーツの分野でも協力を深めるきっかけともなりえましょう。昨年のワールドカップの時のように多くの日本人選手や観客がサンパウロ経由でリオを訪問することになるでしょう。また、サンパウロでも一部の競技が開催され、選手や応援者を受け入れることとなりましょう。

もう一つはジャパンハウスです。日本政府はロサンゼルス、ロンドンに加え、サンパウロにも我が国の戦略的対外発信拠点を設置することとしました。「サンパウロ市民が日本の多様な魅力を楽しめる拠点」となることが期待され、2017年の3月までに開設する予定です。もちろん、サンパウロには既に「リベルダーヂ」に象徴される日系社会が守り育ててきた日本文化があり、そうした伝統と補完し合いながら運営を進めていく必要があります。広く日系社会と多くの協力をおこなう包含的な施設となるべきであり、特に先に述べたような外向的な意識を持つ新しい世代との協力が大切であると考えています。

4. 将来に向けた課題

サンパウロの日本総領事として着任し約5ヶ月が過ぎましたが、なるべくオフィスに留まることなく日系社会の皆様との出会いを重視し、お陰様で様々な日系社会行事に出席させていただきましたので、そこで感じたことを申し上げます。

今後は世代間の対話、様々な団体相互のコミュニケーションが重要になると感じています。現在も若手日系団体がいくつか存在し、精力的に活動をされていますが、そうした次世代の日系人のグループが、今後サンパウロの日系社会を刷新しさらに活性化していく原動力となられるのでしょうか。

一般論として、日系人の将来の世代は、かつてのような日系団体に対する依存度が減じ、ブラジル市民として社会への同化が一層すすむものと思われる。これ自体は自然なことであり、ある意味では喜ぶべきことでもあります。他方それであるからこそ、世代間の対話やグループ間の意思疎通が一層重要になってきます。しかしこれが多大な作業や費用を要するものとなるとは限りません。

例えば、SNSの活用やウェブのような手段を通じたやりとりも可能でしょう。すでに存在するプラットフォームが更に有機的に発展して、サンパウロの若者のみならず、ブラジル全土、さらには日本に在住している18万人のブラジル人ともつながるようになれば尚更よいのではないのでしょうか。

私も最近ソーシャルネットを活用し始め、日系社会との直接の交流を深め、その中で日系社会に対する日本政府の新たなアプローチのあり方を模索しています。

そうした意味においても本日の若い世代を対象とした文協統合フォーラムは重要な意味を有しており、企画・運営関係者に賞賛と敬意を表します。

この2日間の活発な議論を通じて次世代日系社会を担う皆様が様々な課題について議論を深められることを期待します。また、このフォーラムは、皆さんが日頃の相互の関わりを強め、共通の利益を追求するためのネットワークの土台となりえるものと思います。

そして私たちの総領事館も、そのネットワークの一員でありたいと願っています。是非、総領事館にお越しいただいて皆さんのお考えをお話ください。また、これからの計画を私たちにも語ってください。いつでもお待ちしております。

ご清聴ありがとうございました。